

かっこいいことは気持ちがいい

浜嶋鉦一郎

元気な声で「おはよう」と言える。
大きな声で「はい!」と返事ができる。
じっと立っていることができる。
機敏に動くことができる。

特別すごいことができれば、当然かっこいいです。
でも、このような当たり前のことができることでも「かっこいい」と感じます。
かっこいいことは、ひとに感動を与えます。
だから、ひとはかっこよくあることを目指します。
子供たちは、見本となるひとを見ながら成長します。「かっこいい」体験をしながら成長します。
成長しながら、いつも自分のまだできないことをできるようにして乗り越えていきます。
誰でもかっこよくなれるはずです。そのためには、かっこよくできる体験が大切です。

ビーバースカウトは げんきにあそびます
ビーバースカウトは ものをたいせつにします
ビーバースカウトは よいことをします

これはボーイスカウトのビーバー隊の「きまり」です。
「やくそく」は、

ぼくは（わたしは）
みんなとなかよくします
ビーバー隊のきまりをまもります

です。

これは、小学1年生と2年生が、成長段階で通って行く道です。
様々な体験を通じて、身に付けていきます。少し応援をしてあげると順調に進むことができます。誉めてあげたり、見本を見せてあげたりすると、自分で考えながら成長していくのです。何回も繰り返していると自然にできるようになります。

ビーバー隊では、こんなプログラムをしました。
大声コンテストと英語の練習です。



□ 大声コンテストは、スカウトの勝ち!

「次は、大声コンテストを行います」

白木隊長が、そう言った後に、浜嶋団委員長がスカウトの真ん中に立った。

リーダーは、吉川団委員と下北副長の2人だけだ。始める前に、浜嶋団委員長は、2人に何やら話をした。

それから、スカウトに向かって言った。

「私の名前は、『大声出す三』だ。今から大声コンテストを行う。スカウトとリーダーで競争してもらおう。団体戦だよ」「ええ、団体戦って？」

「ひとりずつではなくて、リーダー組とスカウト組でどちらが大きな声を出せるかを競ってもらいます」

「リーダーは2人だけど、負けないぞ」

吉川団委員がスカウトのやる気を出させるように言った。

「僕たちの方は5人だよ。絶対勝つからね」

スカウトの一人が勢いよく返した。

さあ、競争が始まる。

「はい、準備できたかな。」

では、一番大きな声を出せそうな言葉は、なんだろう？

それは、『きゃー』だ。きゃあとってもらおう。

最初にリーダーから言ってもらおう。リーダー、どうぞ」

大声出す三先生に促され、リーダー二人は声を合わせて言った。

「きゃあー？」

「ええー、小さいなあ。これだったら、スカウトの方が大きいだろう」

「スカウトの番です。スカウト、どうぞ」

「きゃあー！」「おお、リーダーよりは大きいな。リーダー負けるな。リーダー、どうぞ」

「きゃあー」

「大したことはないな。全然だめじゃない。スカウトの方が大きいな」

スカウトたちは、リーダーよりも大きな声が出て、大声出す三先生が誉めてくれるので、少しずつ楽しくなってきたように見える。

「スカウトは、もっと大きな声を出してリーダーに教えてあげてください。はい、どうぞ」

みんな、思い切り大きな声を出した。

「きゃー！！」

「すごいな。だんだん、大きくなってきた。リーダー頑張れ！ はい、リーダー」

「きゃあー！！」

「よし、大きくなった。スカウトがこれよりも大きかったら勝ちだ。はい、スカウト」

「きゃあー！！！」

「あははは、スカウトの勝ちー。

みんな良く頑張った。もう一度、全員で声を出そう。はい！」

「きゃあー！！！」

スカウトたちは、浜嶋団委員長に乘せられて大きな声を出した。リーダーに勝って満足げだ。「吉川さん、下北副長、作戦は成功したね。うまくできたよ」

と浜嶋団委員長は、耳打ちした。



□ 英語の挨拶を練習

次が最後のゲームになった。藤橋リーダーが出てきた。

「いまから、自分の名前と年齢を英語で言う準備と練習をします。それは、マイネームイズ 誰誰。 アイ アム シックス イヤーズ オールドと言います。この紙に、これをカタカナで書いて下さい。一人ずつ違うからね。書き終わったら、言葉に出して下さい。大きく言えるようになったら、大声出す三先生の所に言ってテストを受けて下さい。合格したら修了です」

「どうして英語なんかするの？」

「はい、実はね。8月9日にドイツのスカウトがビーバー隊に来てくれます」

「どうして？」

「明後日から世界スカウトジャンボリーが始まります。世界から2万8千人のスカウトが日本にやってきます。すごいでしょ。山口県の瀬戸内海側のきらら浜に集まります。そこに参加するドイツ隊のスカウトが団委員長の家泊まることになりました。これをホームステイと言います。8日に豊中に到着して、9日にビーバー隊の隊集会に団委員長と一緒に参加してくれます」

「ええー、ドイツ人？ それで、僕たちが挨拶するの？」

「そうです。フィリップとポールという高校生です。2人が君たちに挨拶すると思います。その時に自分の名前を英語で言えるようにしましょう」

「男の人なの？」

「2人とも16歳の男の子です。イケメンだよ。カッコいいスカウトだから、君たちもカッコよく挨拶をしましょう」

みんな一斉に書きだした。まこと君は、言われた通り書くことはできたけど、大声出す三先生は、ちょっと嫌だなと思った。

たかし君が、一番にテストに行った。

「ごうかくー！」

この声でお母さんたちが拍手をした。

まこと君は、独り言を言って練習をした。

「頑張らなくちゃ。マイネーム イズ マコト ヤマモト。アイ アム シックスイヤーズ オールド。大丈夫かな」

けいた君も合格した。

「まことー！ どうだー。まだかあ！」

大声出す三先生が、まこと君を呼んでいる。

まこと君は、勇気を出して、大声出す三先生のところへ行った。

「ワッチュアーネーム！」

まこと君は、何を言ってるのかさっぱりわからなかった。

藤橋副長が、後ろから説明した。

「『あなたの名前は何ですか』って言っています」

「あ、そうか。マイマイマイ、マイネーム イズ マコト ヤマモト」

「ハウオールド アーユウ！」

また、藤橋副長が説明した。

『お年はいくつですか』って言っています」

「あ、そう。アイアイ、アイ アム シックス イヤーズ オールド」

大声出す三先生が叫んだ。

「ごうかくー！ まこと君、おめでとう！」「やったー！ やったぞ。今日の最高。お母さんに聞かせたかったな」

まこと君は、今日来ていないお母さんを思い出して言った。

全員が合格した。時間が無くなっていたので、急いで駅まで帰ることになった。

◇ ◇ ◇

次に、7月の舎営の中で、山をきれいにするプログラムとビバレンジャー訓練の合格綱渡りでの励まし合いについて紹介します。

◇ ◇ ◇

□ 自然戦隊ビバレンジャー（ゴミ大王）

入口から何か音が聞こえてきた。

「あれはなんだ！！」

突然、黙って見ていた浜嶋団委員長が、入口を指差した。大きな声にみんなびっくりして、入口を見た。



入口にあらわれた「ゴミ大王」



風船を割るんだ！



ゴミ大王、もう降参か？

入口の閉められている網戸の向こう側に、白い衣装を着たあやしい人が踊っている。顔は黒い布を被っていて眼鏡もかけている。これでは誰かわからない。

「ハハハハ、俺はゴミ大王だ。この山をゴミの山にしてやる！」

大声で叫んでいる。

「ハハハハ、ビバレンジャーたち、向かってこい！！」

ここで、藤橋副長が立ち上がって、スカウトに話しかけた。

「悪い奴が現れました。さあ、ビバレンジャーの使命はなんだった？ 覚えていますか？ 3つありましたね。けいた君、覚えている？」「忘れた」「僕も忘れた」

「私も覚えていない」

「ご飯を食べたら忘れてしまったの？ ビバレンジャーたち、しっかりしてね。

最初だから、もう一度言いますね。

一つ、大きな声で返事をします。

一つ、自然を大切にします。

一つ、集合を早くします。

だったね」

「そうだった」

「思い出した」

「ゴミ大王と言っているよ。ビバレンジャーはどうしたらいいですか？」

「自然を大切にする」

けいた君が言った。

「そうだね。じゃあ、ビバレンジャーの使命を果たして下さい。みんなの力を合わせて、ゴミ大王をやっつけてください」

「よし！ この吹き矢でゴミ大王をやっつけるんだ」「おっ！ まこと君。そういうことだね。この吹き矢が役に立つと思います」

1

「ハハハハ、ビバレンジャーたちよ。何を相談しているんだ。おまえたちは、たいしたことではないな。ゴミ大王と戦う勇氣はあるのか。俺はいまから広場をゴミだらけにするぞ。ハハハハ。バーイ！」

「ゴミ大王が、あんなことを言っています。ビバレンジャーは自然を守らないといけませんですね。頑張ってください」

「いくぞ！」

「おー！ 行こう！」

スカウトたちは、吹き矢を持って小屋をでた。玄関は高いところにあるので、広場でゴミ大王が踊っているのが見える。

「あんなことをしてるぞ」

「許さないぞ」

「行こう！」

「行こう！」

プログラムが一気に活気を帯びた。

「お母さんたち！ 行きますよ」

浜嶋団委員長が、やっと立ち上がったお母さんたちに声をかけた。お母さんたちも素早く動きだし、やる気が出たようだ。

広場では、ゴミ大王が、まっ白いウェアを着て動き回っていた。風船を体にいくつもつけて、袋から新聞紙を丸めたものを出しては、撒き散らしていた。

スカウトたちは、広場に着くと、ゴミ大王の周りを囲んだ。やはり、顔が分からない。

「ハッハッハッハ、ゴミは美しいなあ」

「やめろ！」

「ゴミをまくな！」

スカウトたちは、真剣に怒っている。

「楽しい、楽しい、ハッハッハ」

「この細い体とこの声は、あのリーダーしかいない」

けいた君が言ったけど、まこと君にはどのリーダーか名前が分からなかった。

「顔を見せろ！！」

「顔は見せられないんだ！」

「黒い眼鏡を取れ！」

「だめだ！！ それよりも、俺と勝負をしろ。お前たちが持っている吹き矢でこの風船を割れるかな。風船が無くなったら、俺の力は無くなってしまう。力が残っている限り、ゴミを撒き散らすぞ。ハッハッハ、それー！」 また、丸めた新聞紙を撒き散らした。そこへ、ビバ隊長が駆けつけてきた。

「ビバレンジャーたち！ 悪いゴミ大王をやっつけてくれー！ 私のメガネを盗んだんだ！

風船を割ってくれー！」

あのメガネは、ビバ隊長のものだったのだ。

ビバ隊長の命令で、ビバレンジャーは、全員吹き矢を吹き始めた。ゴミ大王はぐるぐる回って、矢をかわしている。

「割れないなー。跳ね返ってしまう」

「ハハハハ、全然平気だぞ。それ、ゴミだ、ゴミだ、ゴミだ。ゴミは美しい」

「パン！」

「あ、割れた？ 本当？ やばいなあ」

ゴミ大王は、少し心配しだした。

「やっちゃえ、やっちゃえー！」

みんなは、吹き矢だけでなく手も使って割り始めた。

「降参！ 降参！」

ついに、ゴミ大王は座りこんでしまった。

「お前の顔を見てやる。メガネを取れ！」 けいこちゃんが、座っているゴミ大王のメガネを外した。

「あー！ やっぱりー！」

「坂本リーダーだー！」

「参った、参った、参ったよー」

これで、ビバレンジャーの吹き矢のプログラムは終わりと藤橋副長が宣言した。



□ ビバレンジャー、最後の綱渡りで合格しよう

広場に出ると、左側に長いロープが張ってあった。昨日のロープの3倍の長さだ。

「すごいなあ！」

「あれ、渡るのかな？」

「おもしろそう」

「早く渡りたい」

みんな自信があるような言い方をした。まこと君もできると思った。

藤橋副長、浜嶋団委員長、寺田副育成会長が前に並んだ。「はい、このロープは、ビバレンジャー訓練の合格を決める綱渡りです。昨日よりも長くなっています。難しいですけど、勇気を持って挑戦して下さい。

君たちは、ビバレンジャーの修行とビバレンジャーのおきてを守る使命をはたすことができました。そこで、君たちの本当の力をここで見せて下さい」

「渡れなかったらどうなるの？」

「はい、そうですね。各自は渡れるように努力をしましょう。途中で落ちたら最初からやり直します。元気に返事をすると力がつきますよ」

「たけし君！」

「はい！」

「よろしい、ちゃんとおきてを守っているね。頑張ろう」

ロープが長いから、昨日よりもたくさん沈みこむ。でも、なんとか渡れそうだ。

「できました。合格です！」

「よっしゃー！」

たけし君は、うれしそうに笑った。

「けいた！ 大丈夫だ。ロープをしっかり持って進め！」

「おう！」

「次は、けいた君！」「はい！」 まこと君はドキドキしてきたが、二人の渡り方を見てみるとやり方が分かったようだ。

「まことも頑張れ！」

渡り終えたばかりのけいた君が、励ましてくれた。

「まこと君！」

「はい！」

昨日とほとんど変わらなかった。体が倒れないようにまっすぐにしてゆっくりロープの上を歩いていった。

「頑張れ、頑張れ！」

たかし君とけいた君が、終わりの方で大きな声援を送ってくれた。

「やったー！ これでビバレンジャーだ！」

まこと君は、大きな声を出した。あとは、みんなが、けいこちゃんとひとみちゃんの応援をした。

「みんな、元の位置に戻ってください。これで、全員合格です。あとからビバ隊長から、合格証を渡してもらいます」



最後の綱渡りで合格だ 長いロープでも平気だぞ！ 中央の織姫さんがビバ隊長

「スカウトの七夕の願いをかなえるために織姫と彦星がやってきた。「長生きしたい」という願いが、じゃんけんゲームで『長い木』になることで実現した」

私たちリーダーは、野外活動を通じて、スカウトと一緒に楽しく遊びます。多くのゲームを行い、その中で多くのかっこいい体験をさせることで、スカウトたちが成長することを支援していきます。